
殿下の来日と、私

mommonn

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殿下の来日と、私

【Nコード】

N3528A

【作者名】

m o m m o n n

【あらすじ】

王女来日！！一般人の警備員である私（新井）は、いつものように、その警備にも駆り出されることになるのだが・・・ちょっとした悪ふざけと暗い陰謀が、事態をどんどんややこしくしていくこととなる・・・。

第一部：朝霧〜1〜2〜

希望は永久に人間の胸に湧く。

人間はいつでも、現在幸福であることはなく、いつもこれから幸福になるのだ。

ポー普

『人間についての試論』

第一部 朝靄

1、

天使だった。

いや、よく考えれば天使などというものを見るのは人生初めての体験であつて、これが天使なのかどうかなんて判断のしようも無いことなのだけれども、でも、背中に大きな白鳥のような羽を生やし、真っ白いローマ人が着ていたような衣服を纏い、頭に輝く輪っかを乗せ、ふわふわと宙に漂い、満面の慈悲深そうな微笑を浮かべているその姿は、やはり天使なのだと思う。

男か女か何とも言えない中性的で端正な顔立ち。天使は口を開かず、声を発した。

「わたしは天使です」

高くも低くも無い子供のような声。やはり彼か彼女かはつきりしない。天使は続けた。

「わたしは天使です」

辺りを見渡してみる。霧がかつていて遠くの方は何も見えない。まるで濃霧の中にいるみたいであった。足元も霧で覆われている。

「わたしは天使なのですよ」

天使の姿はよく見える。自分と天使以外、ここには誰もいないのかもしれない。

「わたしは天使なのですよ」

天使は相変わらず、屈託の無いそれでいて上品な微笑みをこちらに向けている。

「わたしは天使なのですよ」

またそう言った。ずっと微笑んでいた天使であつたが、しばらくして首を傾げた。そして、少し不思議そうな顔をする。

「わたしは天使なのですよ？」

何度も言わなくても分かる、そう応えようとしたが、何一つ喋ることができなかった。息がひゅーひゅーと喉から漏れるだけで、話すことはできない。

天使はさらに首を傾げる。困ったような表情が覗えた。

「わたしは・・・天使なのですよ？」

分かっている、と叫んだ。叫んだはずだった。盛大に息が漏れる。やっぱり音声にはならない。

天使はゆっくりとこちらに近づいてきた。手が届きそうになる距離まで近づいて、もう一度「わたしは……天使……なんですよ？」と言った。

もう話そうとする努力はやめた。手振りで意思疎通を試みる。しかし、天使は今度は悲しそうな顔をして、言った。

「わたしは……天使なのに……」

そして、天使はすうつと上昇した。急いで手を伸ばす。だが、すんでのところで天使には届かなかった。天使は上方へと消えていった。

何故だろうか、情けない気持ちになった。胸が痛む。

いつまで見上げていただろう、突然地が震えた。地震だろうか。ガタガタ地が震えている。そして、次に上から何かが落ちてきた。ぼとつと肩口に降ってきたものに目をやって、驚愕した。

ナメクジであった。人の拳骨位あるうかという大きなナメクジ。慌てて払い落とす。

今度は逆の肩にナメクジが降ってきた。またしても慌てて振り落とす。嫌な予感がした。恐る恐る見上げる。身体が凍りついた。無数の点が集まって、頭上は真っ黒になっていた。それがすべて、こちらに向かって落下中のナメクジ達だと直感した。

「この子達は可哀そうなナメクジです。あなたに預けます。この子達の世話をよろしくお願いします」

天使の声が何処からともなく聞こえた。

「わたしは天使です」

天使の満足げな声が響いた。地の震えが激しくなる。

「後は、お願いしますね。あなたなら大丈夫」

冗談じゃない、心の中で主張した。ナメクジ群はもう間近に迫っていた。

こいつらは自分の子供じゃない、押し付けないでくれ。厄介ごとだけ残して逃げるなんて都合が良すぎる。こっちの都合も考えてくれよ。

必死の無言の答弁も虚しく、ナメクジは予定通り、降り注いだ。すさまじい勢いでナメクジの雨に打たれる。ねばねばしたナメクジの体液塗れになった。それだけではない。ナメクジは際限なく落ちてくる。下半身がナメクジで埋まる。もぞもぞ何かが蠢く気色の悪い感触。ナメクジの雨は止まらない。すぐに上半身までナメクジは積み上げられていく。遂には無事なのは顔だけになった。それでもナメクジは振り続ける。もう体中がねばねばとべとべになっていた。

そして、ナメクジが眼前数センチまで迫ってきて、もうだめだと観念した時、またしても天使の声が聞こえた。

「やっぱり、わたしは天使ですよね」

ふざけんなっ、声が出ようが出まいが関係ない、思い切り叫んでやろうとした。だが、次の瞬間、一際大きなナメクジがちょうど顔面に降ってきた。

（あっ・・・・・・・・）

目の前が真っ暗になった・・・。

2、

がばっと飛び起きた。

いつの間にかベッドから転がり落ちていた目覚まし時計が、床上で踊りながら電子音を鳴らしている。振動タイプの設定もしてあったので、固い床をその振動でバンバン叩く。電子音以上に大きな音である。

私は目覚まし時計を手にとって、それを止めた。騒がしさが無くなって、何となくほっとした。息が荒い。何度か深呼吸して、気持ちを落ち着ける。

それにしても阿呆な夢を見た。何だっただんだあれは・・・天使とナメクジ・・・何なんだあれは。これまで生きてきたが、これは「阿呆らしい夢ナンバー5」に悠にランクインしそなぐらい阿呆な夢だ。どうして、天使がナメクジを降らすんだ？訳が分からん。波

打つ心臓を押さえて、私はげんなりした。

そして、寝起きでぼんやりする頭を巡らし部屋の中を見回して、私はもつとげんなりすることになった。友人から譲ってもらった石油ストーブがごうごうと熱を放っていた。どうもストーブを炊きっ放しにして眠ってしまったらしく、だから室内はサウナのように蒸し暑い。昔ながらの旧式ストーブに、空気が悪くなったら自動停止するなんてシャレた機能は付いていない。気が付けば自身も汗だくになっていた。寝巻きも掛け布団も汗でぐっしりと湿っていた。

なるほど、私は何となく自分が何故あのような阿呆な夢を見たのか理解できたような気がした。理解できたが……ますます気分は落ち込んだ。

時間を確認する。針は午前七時半を示していた。私は一つ大きく欠伸をした。体調も気分も最悪だったが、今日という日は待ってくれない。特に時間にうるさい上司なんかも待ってくれない。いつまでもぐずぐずしている訳にもいかなかった。

取りあえず窓を開け換気して、それから汗まみれの布団と寝巻きを洗濯機に放り込んで、洗うことにした。これまた友人から譲ってもらった旧式の洗濯機だが、まだまだ現役である。さすがに汗で気持ち悪かったので、シャワーも軽く浴びる。いつもより余計な雑事が増えたので、落ち着いて朝食を取る時間は無く、私はコーヒを一杯だけ飲んで家を出た。

外は寒かった。私は身を竦ませた。室温が上がりすぎていたせい

で、一段と冷え込んでいるように感じる。雪こそ降っていないが、凍てついた一月末の朝の空気。

「寒いすな、新井さん」

唐突に声をかけられて、振り返ってみれば、白金庸夫がいた。いつもの散歩にでも行くのだろう、ペットの犬を連れている。

「今から散歩ですか」私がそう返すと「ちやいますよ、帰りです」と白金は言った。

白金庸夫は私が住んでいるこのアパートの大家である。今年で米寿を迎えるらしいが、そんな様子がちつと感じられないほど若々しい老人で、毎朝こうして愛犬を連れて散歩兼走り込みをしている。走り込みとは一体どういうことかというと、実はこの老人、地元では有名なマラソンランナーだったらしく、今もなおフリーの大会に出場しているとか。もう八十歳も目前で、下手をすればお迎えも目前であるにもかかわらず、フルマラソンを完走してしまうほどの気概と根性の持ち主なのだ。

「あんたは、これからお仕事かね」

「あ、はい」

「それはまた正月やちゅうのに、ご苦労さんなことで。まあ、頑張ってくださいや」

大方抜け落ちた歯が並ぶ口でにつこり笑う白金。

「若いってのはいいもんやねえ。うらやましいかぎりですわ」

それはこちらの台詞だ、と私は心の中で苦笑した。多分、このア

パートの住人の中で一番若々しいのはこの老人だろう。

その時、一陣の寒風が吹き抜けた。「おお、寒い寒い。それじゃ、新井さん。いつてらっしゃい」と衣服を掻き抱いて、白金は自宅へ戻った。私も堪らずコートのポケットに手をつ込んで、急いで駅へ向かった。

第一部：朝霧くくく（後書き）

こんな駄文に目を通して下さって、ありがとうございます^^

ただ単に「王女殿下」というものが書きたくなっただけの理由から始めたもので、深い考えも無かったから・・・色々読みづらいつころもあると思いますが・・・次回もお付き合い願えたら幸いです。

第一部：朝霧〜3〜

3、

自分の仕事を他人に説明する時、私はいつも困ってしまう。簡単に説明するなら、ガードマン、ということになると思う。けれども、そんな単純なものではないのだ。

一口にガードマンと言っても、それこそピンきりであって、例えば、アメリカ大統領などの要人を護衛するSP（元々は私服警官のことなのだ）とか呼ばれているボディガードと、夜中に寂れた漁港の倉庫を警邏する警備員と、あなたは同じものと見なすだろうか。そんな訳ない。そもそも「ボディガード」と「警備員」では存在意義そのものが違う。個人を守るのと会社の警備をするのではやはりそれは実際全然違うものなのだけれども、でも実は同じ枠組みの中に組み込まれていたりもする。大体は警備会社の中で選別したりと、それぞれ違う役割の仕事をしていくという感じだ。

そして、私はピンではなくどちらかと言えばキリの方で、要するにいたって普通の警備員なのだが、わたしが「ガードマンをやっています」というと、勝手に勘違いをする人が多い。すごいですね、大物政治家の護衛とかするんですか。いや、大物政治家って、あなた、別にそんなことしませんから。そういうのは、もと軍人とかもとSAT（警視庁特殊急襲部隊）出身者とか特別な経歴を持ったプロフェッショナルの仕事でしょうが。しかも、大抵、偉い方というのは個人でボディガードを雇うことがほとんどで、あまり警備会社に要請したりしない。どのみち、ボディガードとなるにはややこしい資格みたいなものがある。

身長百八五センチ、体重七十九キロ。確かに私は平均よりかなり大柄な男であると思う。しかも、大学のクラブでラグビー部に所属して、そこで結構本格的な活動をしていたから、肉付きも悪くはない。柔道も初段は取得している。勘違いされてもしようがない様な気もするし、なんでそうなるんだよ、と突っ込みたいような気がする。

私の基本的な仕事は通称「二号警備」といって、交通誘導やイベント会場の人員整理などが主だ。そこら辺の、皆が良く知っているだろう、警備員のうちの一人でしかない。背格好だけで判断されても困るのである。

とにかく、もう最近では面倒くさくなって、逐一訂正することもない。勘違いされて、別に困るわけでもないし、正直どうでもいい。

東京を離れて京都の大学を受験しようと考えたのにもたいして深い理由が無かったように、大学を卒業して、特にやりたい仕事が無かったので、私は友人に紹介されるがままとりあえず「ガードマン」という職に就いてみた。ところが、これが以外に居心地も良く、私はそのままこの職業に従事している。世間が考えるほど、危険なこともまず無いし、体力さえあれば大変な仕事でも無い。実のところ、案外私にとって天職なのかもしれないなあ、と近頃ぼんやり考えてみたりもする。

電車は相変わらず混んでいた。だが、東京の朝の通勤通学ラッシュと比べればそうだったものでもない。目的駅まであと二十分ほど。会社はその駅から徒歩五分以内のところにあるから、ぎりぎりにはなってしまうが遅刻することは無いだろう。

何気なく車内の広告に目をやった。有名芸能人の恋愛スクープがすっぱ抜かれている横には、政治家の集団スキャンダルの見出しが。そして、センターをでかでかと飾るのは「王女来日！」の四文字。

私はため息をついた。今週になって、何度も目にするし耳にする言葉だ。何もわざわざこんな季節に、ようするに正月明けのこんな時期に、訪日しなくてもいいと思う。正直、やめて欲しい。おかげで、今日も本来は休暇であつたはずなのに、予定外の仕事をこなすことになった。

中東の石油王国として有名なとある国の王女が、親善のために、明日来日するのだ。日本とその国は互いに相手を重要な貿易パートナーと認識していて、両国の交流は盛んである。さすがに国王自ら来ることはまれであつたが、首相や王族方が日本を訪れることはしばしばあつた。ただし、王女の来訪はこれが初めて。特に昨今、かの国では周辺国との民族問題などで緊張が続いており、外交政策に一段と力を入れているらしい。日常で弾丸が頭上を飛び交う世界。私には想像も出来ないが、王女はそんなところから日本へとやって来る。

王女は「古き良き京都」を訪問することになっている。ただでさえ交通の便も悪く、都市機構もそこまで整備されていない京都市にとって、こういうビッグな人物の来訪というのは大変なことなのだ。にもかかわらず、やはり日本の都として定着があるのか、外国人は大抵この京都を訪問しようとするから、悪循環していると言わざるを得ない。

京都を訪れるのだから、京都三条に支社のある、私が勤める警備会社にも勿論仕事舞い込むわけで、私は明日一日中、王女のパレード用の御車に野次馬たちが群れるのを防ぐため、沿道に立ちつく

す破目になる。

（絶対寒いんだろうなあ、もう・・・勘弁してくれ）

夏暑く、冬寒い、京都。だからこそ、私は王女の来日がもう少し早まるか遅くなるかしてもらいたかったのだが、一市民の都合で国家計画が動かせるはずも無く、やっぱり王女は明日御越しになる。

「三条、三条でございます。お降りの際は足元に・・・」

車内アナウンスが流れた。ゆつくりと電車は減速を始めた。駅に着いた。はあ、と人目に触れない程度に大きく息をつく。そして、私は多数の乗客と一緒に三条駅のホームへと吐き出された。

会社のオフィスにはほとんどの社員が集まっていた。別に遅刻したわけでもないのに、私は妙な気まずさを感じて、小走りに主任のデスクへ駆け寄った。

「すみません、遅れましたか・・・？」

「いいや」そう言って、主任は書類から目を離して正面を向いた。「別にそんなことは無いから心配しなくてもいい」

「は、はあ・・・」

前頭部が寂しくなりはじめた町村幸造第二課主任はこのところ不機嫌であった。特に最近、彼は急激なスピードで頭髪を失っているようで、どんな育毛剤を使っても少しも効き目が無い、いつも

私たち平社員は町村の愚痴に付き合わされている。だが、なぜか今日ばかりは、心なしか嬉しそうであった。

「でも、今度からはもうちょっと早く来い。何事も早め早めに行動すべきだろう」

「・・・あ、はい、そうですね」

ぞつ、とした。町村の声が妙に優しい。人格も丸くなっているような気がする。何かいいことでもあったのだろうか。それとも、裏でもあるのか。

「明日のことでミーティングをするから、三十分後には会議室に集合しろ。分かったな」

とりあえず早くこの空間から開放されたくて、私はこくこく何度も頷いた。主任の、行ってよし、のゴーサインが出るやいなや、私は一目散に自分のデスクへ逃げた。

デスクで仕事を始める準備をしながら、町村の方を陰から覗く。鼻歌交じりに書類に判を押す第二課主任。それを見て、私はこれは絶対に何かあると確信した。

「主任、上機嫌でしょう」

隣の席の川村剛が小さな声で囁いた。

「何だあれ、何かあったのか？」私も声を抑えた。

「いや、それがですね・・・どうも、昇進の話が出ているらしいんですよ」

「昇進？」

「ええ。なんでも今回第二課にお鉢が回ってきた王女様の来日警衛、それが無事終わったら、主任の昇進は決定的らしくてですね、本社のほうに移動になるんだとか」

「ふーん、主任がねえ・・・」

横浜に本社を構えるこの警備会社は、先も言ったように京都とさらに仙台とに、二つの支社がある。総社員数は三百名前後。まあ、大きくも小さくも無い、中小企業かな、という感じである。創業もごく近年で、比較的新しい会社だ。

そして、この町村主任だが、彼は未だに支社の一課長。四十歳も近い彼の年齢も考えると、やはり少し出世が遅い。私も町村主任とは三年間いっしょに働いてきたし、その仕事振りを見てきたが、別に無能というわけでもないから、つまりちよつとしたことで出世コースから脱落してしまった悲劇の中間管理職というやつなのだろう。

「ああ・・・それと、何だか肌に合う育毛剤も見つけたらしいですよ」

川村は真面目くさった表情で言った。私は苦笑した。

川村剛は今年入社したばかりの新人だ。私の三年後輩にあたる。真面目なのだが、多少人より調子が外れていて、時折おかしなことを言う。天然ボケ、とも違うのだが、それと近い感じはある。けれども、憎めない好人物でもある。

「とにかく、良きかな良きかな。ようやっと、主任にも運氣が巡ってきたってわけだ」

「そうですね、確かに良いことですよ。主任の機嫌が好いことは」

今度は川村は笑って言った。

まあ、私としても、主任のことは別に嫌いではない。ごちゃごちゃ小言を言う彼のことを、常日頃、疎ましいとは思っているのだが、それが嫌いという感情と直結しているわけではない。だから、今回の話も素直に祝福したいと思う。

「主任は一人身だし、仕事だけが生きがいみたいな人だからなあ。そりゃ、嬉しいはずだろうよ」

「でも・・・そうしたら次は誰がこの第二課長の椅子に座るんでしょうね？」

「さあなあ」

次の主任が誰であろうが、どうでもいいこと。どうせ、仕事の内容が変わるなんてことは無いのだし。

「おい、川村ちょっと来てくれっ」

突然、町村が声を上げた。書類を手にして、小難しそうな表情をしている。

「あ、は、はいっ。今行きます」

川村は慌てて立ち上がって、主任のデスクへと走った。慌てすぎたせいか、電気の配線コードに引っかかって、すっ転ぶ。盛大にコケた。オフィスに失笑が漏れる。

「何やっとなるんだ、早く来い」

相変わらず上機嫌な主任は、苦笑いする余裕を見せて、言った。
川村は照れくさそうに頭を掻いた。

（平和だよなあ・・・）

私は心底そう思った。

第一部：朝霧〜4〜

4、

ミーティングは潤滑に進んだ。昇進を目の前にちらつかされて、俄然やる気の出ている町村主任がてきぱきと仕事をこなし、配置や時間の打ち合わせ、警察などの公共機関との連携、クライアントの意向、などが決定及び確認された。私は御所前の参道で通行人の整理を担当することになった。いつものように、佐々木さんとタッグを組んで仕事をする。

佐々木さんというのは、私の先輩にあたる人だ。彼は相当ここでの仕事がいらいらしく、第二課の又シと名高い町村主任とも十年越しの付き合いになるんだとか。気さくない人で、私も入社したての頃は、よく面倒を見てもらった。ただ、無類の酒好きで、それが原因かどうか知らないが、子供と奥さんとは現在別居中。月末に一度訪ねて来る、小学校に入学したばかり娘の顔を見ることが、今一番の生き甲斐なんだそうだ。今年で彼も45歳。比較的遅くできた子供のことが可愛くて仕方ないのだろう。

現に会議中、彼は財布の裏側にプリントアウトしてある娘の写真をこっそり眺めて、にやにやしていた。「子煩悩」という言葉を凝縮して煮詰めて人型にぶち込んだら、きっと彼のような人間ができるに違いない。

で、私は佐々木さんと仕事でよく組む。どうしてもかはよく分からないのだが、彼とはタッグを組むことが妙に多い。

ちなみにタッグと言っても、刑事ドラマなんかでよく聞くような

格好のいいものではない。互いに相手が仕事をサボらないか見張るだけ。もしくは一人の身に非常事態が起こった時に、本人に代わって連絡系を担当するとか、その程度のものだ。

集合時間は、明朝午前五時。それまでにはオフィスに集まれとのこと。今日のところは明日に備えて、それで解散となった。

アパートに戻った私は、また白金老人と出会った。彼は、アパートの隣にある納戸の屋根に上っていた。

「何やってるんです？」私が声をかけると、緩慢な動作で白金は振り返った。

「あれ、新井さん。もう、仕事は終わらはったん？」

「ええ、まあ・・・明日は早いですし・・・」

彼は、右手に金槌、左手に木箱を持っていた。私の物問いたげな視線に気付いたのか、「いやあ、ちょっと、大工仕事ですわ。なんや、雨漏りしとったみたいで」白金はそう言う。

それにしても、パワフルなお年寄りだ。そんなこと、業者に頼んでやってもらえばいいだろうに。今時、数千円も払えば屋根の修理ぐらいやってくれよう。

「良かったら、手伝いましょうか？」とりあえず、心にもないことを言っておく。本音を言えば、さっさと自分の部屋に帰りたいかったのだが、八十歳にもなる老人一人を残して、自分だけ自室でぬくぬくとするのもまた、気が引けた。

「ほな、その板とってもらえます？」

「板？」白金の指差す先には、結構大きめの木板が束になって置いてあった。

「これですか？」

「はい、そうです。一つ取ってください。それでこの最後の穴を塞いで、おしまいなんですけど、下まで降りんの億劫なんですわ」

言われた通り、私は板を一枚、屋根の上の白金に渡した。

「どうも、助かります」

「いえいえ……んで、他には手伝うことは無いんですか？」

「はいな。そもそも、別に今日慌てて補修する必要は無いですし」

「え？」

私が聞くと、白金は笑って「あ、いやぁ……たしかに補修は今日やなくてもいいんですけどね……実はなんかやってへんと、落ち着かんのです」

「どうして？」

「だって、ほら……明日に王女様来る、いう話やないですか」

「そうですけど……それが、どうしたんです？」

「いやぁ……なんか緊張してしもうて……」

はぁ？そう思わず言い返しそうになったが、ぐっと堪える。なにを言っているのだろうか、この人は……。

「緊張って、なんで？」

私が言うと、白金は意味ありげに微笑んだ。

「ちよつと・・・まあ、いろいろありまして」

釈然としない答えだったが、私はこれ以上突っ込むのはやめた。
ややこしいことになりそうな予感があった。今日はもう、明日のために、ゆつくりと休みたい。

「なんか良く分からないけど・・・まあ、いいです。で、もう作業はおしまいなんですか？」

「あ、はい。もう終わりにしますわ。片付けは勝手にやりますさかい。助かりましたよ、新井さん。んで、あんたは明日、早いんとちやいますの？」

「ええ、まあ」

「ほな、早う寝て、明日に備えてくださいな」

「はあ・・・」

「明日はまた冷え込むらしいし、早よ休まはったほうがええ」

「・・・それじゃあ、そうさせてもらいます」

私は、白金老人の言葉に従った。実際、明日の仕事はきついものになると思う。だから、さっさと帰って寝ることにした。もちろん、ストーブの火は消した。

第一部：朝霧〜5〜6〜

5、

翌日、まだ早朝にもかかわらず、京都の街は人で溢れていた。始発の電車にも、日ごろでは考えられないほど、人は多い。

表参道に顔を出してみれば、どこを見渡しても、人、人、人・・・。
警察関係、報道陣に警備関係の同業者、さらには一般の人々、つまり野次馬。たくさんの方が表参道、そして京都御所までの道にこつた返していた。

私はうんざりした。どうもこうも、まだ王女の京都ご到着までには、五時間ほどの猶予がある。
仕事の人達は仕方ないにしても、こんな強烈に寒い時期、朝っぱらから王女の顔を拝むためにけに集まってくる群集たちの気が知れなかった。

どうも私は著名人とやらに、免疫ができてしまったらしい。

仕事柄、世間では有名人やビップとか呼ばれる人たちと、ものすごく遠くからではあるが、よく接する。ハリウッドスターの誰々が京都訪問。天皇陛下の御遊覧。オリンピック選手たちの海外遠征。挙げればキリが無いが、その度に特別召集がかかるのは現実。警備員の職に就いてま

だ三年しか経っていなかったが、いつのまにか数え切れないほどの

仕事をこなしてきたみたいであつた。

だからか、著名人との接触が無駄に多い私には、そういうミィハ―な群集心理がまったく理解できない。

とは言つても、実はビップを直接守るのが私たちの仕事ではない。どちらかといえば、彼らを守るボディーガードたちの警備、に近いような気がする。まあ、所詮人員整備なので、警備対象の半径五メートル以内に近づいたことは一度も無かつたりするのだ。しかし、そんな距離であつても要人たちの顔ぐらい十分に見てとれるし、話す声も聞こえる。だから、それは「接触」に力ウントしてもいいと思う。

とりあえず、群がる人々と一緒になつてきやあきやあ喚くことに、少しの魅力も感じないのは確かであつた。

会社のオフィスに行つてみると、佐々木さんの姿が見えなかった。遅刻だろうか。

「なあ、佐々木さんはどうしたんだ？」

手近な同僚に尋ねてみたところ、「あの人ならインフルエンザにじらせて、緊急入院だつて」と

いう実にショッキングな答えが返ってきた。

「インフルエンザ？」

「ああ。40度超える高熱出して、夜道でぶっ倒れちゃったらしい。救急車で中央病院に運ばれたんだってよ。」

「大丈夫なのか？」

「主任は大丈夫だって言ってたぞ。別に死んじまうってことはないそうだし。」

そういえば、全身がだるい、とかそんなことを会議の後、言っていたような気がする。どうせまたいつもの二日酔いだろうと、思っていたのだが……。

私は眉をひそめた。

命に別状は無いといっても、心配だ。日ごろの不摂生が祟ったのだろうが、それにしても救急車で病院送りとは。年齢のことを考えると、彼の自業自得と笑い飛ばすことができないところが、ちよつとリアルで嫌であった。

そして、私はあることに気付いた。ここに佐々木さんがいないということは、要するに、警備要員に穴が開くということだ。そうしたら今日、私はタッグの相手がいらないということになる。

え、どうするの？と少しぼけっと考えていたら、「新井、ちよつと」と町村主任に呼ばれた。

主任は表情を硬くしていた。多分、佐々木さんのことだ。

「もう、誰かから聞いたとは思うが……」町村は言いにくそうにそう前置きして、

「佐々木のことなんだが、あいつは今日は休みだ」

「インフルエンザ、だそうですね」

「ああ、今は入院中だ。でも、問題ない。命に別状はないのとどこからな。ただ、意識が飛んでるらしい……」

「そうですか……」

私以上に、きっと町村も佐々木さんのことが心配なのだろう。主任は彼との付き合いも長い。

人並み以上に思うところがあるに違いない。

「それでだ、佐々木が抜けたってことは……」

「ああ、はい。一人足りないってことですよね。それに、私の組む相手もいませんし」

「その件なんだがな……」

町村が顎で指す。その先には、川村の姿があつた。

「代わりに川村を当たらせることにした」

「川村を？」

「ああ」

なるほど。さっきから気になってはいた。川村が、妙に近寄りがたい異様な空気を放っている

のだ。おはよう、と話しかけることすら躊躇わせるほど空気が彼の周囲に漂っている。そして、そ

んな彼の虚ろな両目はどこか遠くを見やっていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ちらつと横目で彼の顔を見やる。うゝむ、相変わらず暗い。そのうち雨でも降ってきそうなくらいだ。

「まあ、悪いとは思うんだが・・・仕方ない」

主任が気にしているのは、多分こういうことだ。

私たちはローテーションで仕事を分担している。我々の警備任務は、現場での警備と本部での総連絡係との二つの役割で成り立っている。その時に、大抵の人員が現場に回されるのだが、何人かは好環境の本部で内務ができる。もちろん、真冬のこんな季節、誰もがヒーターの効いた社内での内勤を望むのは当然であって、だからローテーションで内勤と外勤とを交代交代に回すというようなことをしているのである。

川村が、去年入社したばかりの新人、とは先も述べた。だから、ローテーションの巡りが遅い、ということがある。古参の社員のほうが新人より良い目を見るのは当たり前の話で、だから昨日の会議中、自分によやく内務の役割が回ってくることが決まっただけで、川村は大喜びしていたのだ。

「・・・・・・・・しょうがないんじゃないですか、可哀相ですけど」

「うん。ま、という訳だ。お前は予定通り頼むぞ」

川村を励ましてやってくれ、と冗談交じりに言って、町村はオフイスを出ていった。なんでも、本社の人間と打ち合わせがあるのだそうだ。

私は、特別に主任の言葉に従ったわけではなかったが、川村のデスクに向かった。

彼はぼんやり前方を見つめていた。そして、横に立った私に気付いたのか、彼の顔がこちらに向いた。

じいっと私の目を覗き込んでから、彼はがっくりと首を垂れた。そして、

「新井さん、もう何とかしてくださいよぉ」

川村は泣きそうな声でそう言った。私は、半ばうつんざりしながら、答えた。

「無茶言っとなつての。そりゃあ、まあ、可哀そうだとは思っけど・・・」

「どういふことっすかつ、何すか、もう・・・せつかく、ようやく・・・うう」

「まあ・・・あれだ。俺もこういふことはよくあったから・・・気にすんな」

「それって、慰めの言葉になってますう？」
「・・・・・・・・・・」

言葉に詰まった私の様子に、彼は大きくため息をついて「そもそも、今来るのってあの有名な王女様なんですよ。しかもお忍びじゃない。大々的に宣伝した上での御越しですよ。いっぱい、野次馬が集まるんでしょうよ、きつと。あの王女様かなり美人だし、人気ありそうだし。正直、もういやなんですよ、大物の警備と関わるのは・・・」

川村はいじいじと、そう洩らした。

「あの時みたいなのは、もう御免ですよ」

あの時・・・それは前回の警備任務のことだろう。

昨日、とある超人気芸能人が京都に来た。当然のごとく、私たちは警備に駆り出された。

甘いマスクとマフラーとメガネで、特にご年輩の日本人女性の心を鷲掴みにするその有名芸能人。彼の来訪で、京都は沸きかえったわけだが・・・そこで川村は不幸な目に遭っているのがある。

川村は、京都駅のバスターミナルの一角で人員整備をしていたらしい。そこを有名芸能人の一行がお出ましになった。途端に現場は大混乱に陥って、意地でもラインを超えて有名芸能人に群れかかろうとする衆人と、それに対抗してスクラムを組む警備陣がぶつかり合った。押し合いへし合いの団子状態。

頭を殴られ、腹を蹴られ、足を踏まれ、それでも川村は必死に耐えたのだそうだ。そして芸能人が去り、ほっと一息ついた川村だが、そんな彼に想像を絶する苦難が襲いかかることになる。

現場が落ち着いて、ようやく余裕ができた川村はそこにいたって、鬼のような形相で自分を睨む年輩の女性、の存在に初めて気付いた。

どうして自分が睨まれているのか理解に苦しんだ川村であつたが、すぐに事態を悟る。女性の「この人、痴漢ですっ」の台詞。それが場を揺るがした。

先の余韻で、まだざわついていた現場がしゅんと静まり返る。

川村としては、はあ？の一言に尽きた。何だって、痴漢？

無論のこと、川村には覚えが無い。断じて無い。そもそも、川村にはそんな性癖は無いし、結婚を前提として付き合っている彼女までいる。しかも、彼はまだ若い。何もわざわざそんな好き好んで・・・まあ、明言はさけるが、彼には痴漢に走る理由が一つも無かつたし、現にやっていない。あ、いや・・・不可抗力、としてならばあつたかもしれないが、それもよく考えてみれば、先方から敢えて突進してきているのであつて、こちらには非は無いはずだ。もしくは、自身の二重人格や記憶障害などで「やったことを憶えていない」などが考えられただが、そんなものは現実的でないと言わざるを得ない。何にせよ、川村が「痴漢」となる可能性

は極めて少なかった。

と、そのような若い激情に任せた（ある意味失礼な）主張を川村はしたのだそうだが、問答無用。川村の味方は同業者の警備員ぐらいしかおらず、周りの女性方は皆彼の敵に回っている。

「警察っ、警察っ」と興奮した群集たちは同様に現場付近を警衛していた警察官を呼び、さらに現場責任者である町村主任までが慌てて駆けつける始末。結局、川村を痴漢だと紛糾した女性がかついうケースで非常に有名な人間、つまり「騒動屋」的なことを常習にやっている（というか、ある種の癖になっているらしい・・・全くおかしい時代である）ことが、警察のデータベースで判明し、事なきを得たのだが・・・。

体中に打ち身をこしらえて、さらに理不尽な冤罪の疑いをかけられた川村。後、帰社した川村は山のような始末書を書かされ、その上誤解であつたにも関わらず場を騒がしたとして減俸まで食らった。この話は社内で長い間笑い話のネタになっていたが、本人にとっては笑い事ではないだろう。ご愁傷様、なことだ。

私は笑って「あんなことがそう頻繁にあつたら、警備員なんてやってられるかよ。グチグチ言っていないで・・・諦めろ」

「はあ・・・」

「ほれ、そろそろ時間だろ。さっさと準備しとけよ」

明らかに落胆する川村。まあ、これもいい経験になるのだろう・
・多分。

6、

会社の車で現場に向かう。先ほど、町村から最後の指示を受けた。

「いいか、お前ら午前の組がおそらく一番大変だ。ちょうど王女が来る瞬間に立ち会うことになるだろうからな。午後の組は、事後処理だけ。つまりだ、午前の組のお前らに頑張ってもらわねばならないということだ、分かるな」

町村はぐると首を回してそう言う。

「社訓を忘れるな。適当に手を抜き、適当に踏ん張り、そして全力でトラブルを避ける。トラブルは受け止めるんじゃないぞ、避けるんだ。いいな・・・よし、それでは解散」

社用の大型バンが現場に到着した。午前七時。時計台の短針が、ちょうど「7」を指し示したところであつた。

「時間ピッタリですね」

川村がバンから降りてきて、言った。

「ああ。あと三時間ってどこか」

辺りを見渡せば、人の数がまた一段と増えていた。そろそろ、王女が関西国際空港に着くであろう。彼女の一行はそのまま、車で京都市内に入る。そして、新しく完成した、御所の迎賓館へ。

「・・・にしても、人が多いな・・・」

「まあ、ねえ。他にすることが無いんでしょう、きっと」

だったら、家で寝ていてくれ・・・頼むから。そんな願いも、なんのその。人々は時間に比例して、どんどん増えていくようだ。地下鉄の乗降口から、また大量の人のかたまりが飛び出してきて、私は頭を抱えなくなった。

「とりあえず、準備をするぞっ」最後に下車した組部長が、怒鳴る。彼以下、私も含む七名の警

備員と派遣されてきた警察官らで、この一帯を警備する。駅から迎賓館までの行程をカバーしなければならぬので、あまり局部的に人数を集中できない。よって一人の負担が増すことになるが、この際仕方ない。

準備と言っても、コーンを立てたりテープを張ったり、その程度。

ものの数十分で、作業は終
わり、あとは王女の到着を待つだけとなった

第一部・朝霧〜5〜6〜（後書き）

やっと、次回から殿下が登場します・・・長かった・・・（汗）

第二部 日出く1く2く

1、

関西国際空港午前八時九分着の王家所有専用旅客機「エンゲール」が、日本領空へ近づいていた。最新鋭のジェットエンジンの鳴らす音は静かなもので、快適な空の旅を保証してくれる。

その機内、カミル・ハーン祭司は落ち着き無く歩き回っていた。あと三十分ほどで、日本入り。否が応でも、緊張感が増す。

国際的にも、確かに日本の治安はずば抜けて良い。下手をすれば、本国よりも安全なのだが・・・そういう問題では無かった。ただの遊覧ならばそこまで心配することは無いが、今回の来日にはちよつとした、しかし何としても成功させねばならない目的があるのだ。

ちらりと、カミルは振り返った。今回の来日の主役である人物はゆつたりとシートに腰掛けている。

「爺、座っていたほうがいいのではないか？もうすぐ、着陸態勢に入るぞ」

「・・・判っております、殿下。少しばかり、心配なだけです」

纏め上げられたブロンドの髪。切れの長い両眼に浮かぶ瞳はうつすら緑色の光沢を放っていた。卵のような形の顔の輪郭も、まだ14歳という年齢を考えれば、大人びた造りをしている。母親に似たのであるう、その容姿の美麗は王室の威厳というものを、見たものの心に深く焼き付けることとなるに違いない。

カルメス王室第一子王女、リザ・カルメスは小首を傾げた。

「心配？一体、何を心配することがある？ただの親善来日ではないか」

「・・・そう・・・でございましたね」

「・・・？」

怪訝そうな顔つきのリザ。カミルは少し笑って口を閉ざした。

この王女は今回の訪日の、本当の目的を知らない。「娘には伏せておけ」リザの父親であり国家の最高執政者たる国王の意向なのだ。議会も、さらには内閣の長である宰相ですら、その命は絶対。ましてや、王家教育係の自分は一官吏にしか過ぎない。どうして、王の指令に逆らうことができようか。

無論のこと、幼少の頃より王女の世話をしてきた身としては、彼女を騙しているという罪悪感で心苦しくもある。だが・・・老兵はただ黙して、王の意向に従うまで。

申し訳ありません、王女殿下。カミルは心の中でそう呟いた。

2、

関西国際空港午前八時九分着の王家所有専用旅客機「エンゲール」が、日本領空へ近づいていた。最新鋭のジェットエンジンの鳴らす音は静かなもので、快適な空の旅を保証してくれる。

その機内、カルメス王室第一王女リザ・カルメスはゆったりとし

た造りの椅子に腰掛け、日本入りを心待ちにしていた。

国際的にも、日本の治安はいい。少なくとも内紛寸前の自国よりは良いはずだ。だから、鬱陶しい防弾チョッキを羽織る必要もないだろうし、それにおそらく、迎賓館の接待か何かで「サシミ」という料理が出されることに違いない。リザは一度、英国で「サシミ」を食したことがある。「これは日本の有名な料理でございます」との料理長の言葉も耳に新しい。その時食べたあの「サシミ」の味が今でも忘れられないでいた。なんとも美味なのである。しかし、領地が海に面していない自国では新鮮な魚料理を食べられる機会は、たとえ王女と言えどもそうあるものではない。だから、リザは今回の来日を楽しみにしていたのだ。何せ「サシミ」の本場。期待していいはずであった。

でも、ただの「楽しみな遊覧訪日」・・・というわけでもなかった。今回の来日にはちよつとした、しかし何としてでも成功させねばならない目的があるのだ。

リザは眼前を落ち着き無く歩き回る人物に目をやった。顔色が優れず、視線も定まらない。いつもの「緊張癖」だろう。その人物がくるりと振り返った。リザは声を掛けた。

「爺、座っていたほうがいいのではないか？もうすぐ、着陸態勢に入るぞ」

「・・・判っております、殿下。少しばかり、心配なだけです」

神官特有の長い白色ローブを纏い、頭に冠を頂いている。真っ白に染まった彼の髪の毛はその年齢の過多を如実に示していたが、背も真っ直ぐに姿勢良く、老いたる風をあまり感じさせない。しかし、その眉間にはいつも以上に深い皺がより、目にも疲労の色が浮かん

でいた。

侍従長兼王家教育係カミル・ハーン司祭は疲れた笑みとともにゆつくりそう答えた。

「心配？一体、何を心配することがある？ただの親善来日ではないか」

相変わらずの心配性だな、とりザは胸内で苦笑した。けれど・・・実際、このカミルには心配をかけることになるのだ、それを思うと心苦しい。

「・・・そう・・・でございましたね」

「・・・？」

なにやら、意味深に微笑むカミル。まさか「計画」ばれているのか、とりザは少しだけ焦りを感じたが、まさかそんなはずがないとすぐに打ち消した。もしばれているのなら、父上やカミルが何もしないわけが無い。見透かしていて、なおわたしを泳がす必要などないのだから。「お前の考えはお見通しだぞ」と釘を刺せばいいだけの話。わたしはそれで諦めるだろう。だが、まだ誰も「計画」のことについて触れようとしていない。ばれていないと考えるのが自然だ。わたしの「計画」が他に漏れていることは無い、そう思い直して、リザはふうつと息をついた。

「計画」は必ず実行する。熟慮の結果だ。日本ほど治安の良い国はそうは存在しない。また同時に例の話を信用するならば、日本、というより来訪先の京都こそ都合のいい場所が無い。そして、日本に出向く機会もそう有りはしないだろう。ならば、この場所、この瞬間を逃すわけにはいかない。

しかし、それは今まで世話をしてくれたカミルをも裏切ることになる。心配性のカミルのことだ、また胃潰瘍で寝込まなければいいが……。

許せ、カミル。リザは心の中でそう呟いた。

第二部：日出る

3、

無線に急報が入った。慌ててイヤホンの音声チューナーを上げる。

「対象が表参道に入ったらしい、もうすぐこっちだ、気を抜くな
っ」

組部長からの連絡。私は川村と顔を見合わせた。

「おいっ、来るぞ」

「ええ、来ますね」

そして何度か頷き合って、それぞれの立ち位置へ。

言われてみれば、確かに遠くのほうで楽隊の演奏のようなものが聞こえてくる。人のざわめきも増したようだ。

よしっ、と気合を入れる。今日も無難に任務をこなすとするか。
いつでも来い。

歓声が爆発した。楽隊の先頭が曲り角に姿を現した。続いて、黒塗りの車が何台もその後が続く。

そして、楽隊が通り過ぎる頃には、場の空気はヒートアップ、群集のテンションも臨界状態に達した。王女の乗る車が、角を曲がつ

た。わあっ、と人々から嬌声上がる。

「よっしゃあ、気合入れろやつ」

組部長からの激励が飛ぶ。

（言われなくても分かってるよ・・・くそっ）

人々からの圧力が一気に増す。川村も泣きそうな顔で突っ張って立っている。

パレード用のスピードで、ゆっくりと王女の車がこちらへ向かってくる。楽隊の歩くスピードと同じなのだから、非常にゆっくりとした進み方だ。

私はいらいらしながら、車が通り過ぎるのを待った。あと20メートル、10メートル・・・遂に王女の車が至った。少し首を回して、後ろを振り向く。

眼前を黒塗りの天蓋車がゆるゆると進んでいく。視線を上へ。だが、大きなSPの男の影に隠れて、王女の姿は確認できなかった。

何だおもしろくない、と思いつながら、私は視線を戻そうとした。その時に、SPが何故か急に屈み込んだのである。そして・・・その向こう側に・・・私は王女を見つけた。

真っ白であった。純白のドレスのようなものを着ている。何かしらの既視感に襲われるのと同時に、寒くないのだろうか、と馬鹿なことを考えた。肩口から下がない、つまりワンピースとかいう、そういう趣向のものを王女は身に纏っていて、この季節のことを思

えば、それはあまりにも寒々しい格好のように思えた。

だが、にこやかな笑みを浮かべ人々に向かって優雅に手を振っている彼女の様子からは微塵もそんな気配は感じられなかった。また、惹きつけられる不思議な力のようなものも感じた。

へえ……まだ子供だとはいえ、偉い人間というのはやはりそういうオーラみたいなものが出るのだな、私は妙に納得した。

そうして、天蓋車は私の前を通り過ぎようとしていた。

息をつく。もう終わりか。あと少しでピークも過ぎて、ここの警備から開放される。だが、誰かに踏まれた右足がかなり痛かった。運動靴ではなく、革靴かヒールか何かで踏まれたに違いない。それなりに……ズキズキ疼く。

痛えな、と王女自身とこのことは別に何の関係もないはずなのだが、なんとなく後方の天蓋車に恨みがましい目をやったのが、今思えば間違いのもつたのだらう。

射るような視線。王女と目が合った。ほんの数秒のことだったが、どきり、とした。気圧された……。そんな感じがした。まさか、10近くも年の離れた少女に気負けするとは思えなかったが、何かしらあの目に強固な意志を感じた。

一瞬交錯した視線はすぐに外れ、また王女は向こうの方へ向いて、笑顔を振りまいていたが……。私は何故か……。嫌な予感を覚えた。「何か起こるんじゃないだろうか」騒ぎ立てる群衆の中、妙に冴えきった頭でそんなことを漠然と考えた……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3528a/>

殿下の来日と、私

2010年10月15日22時46分発行